

あまりの美しさに息が止まった。

それが目の前にいる彼のせいだということはすぐに分かった。

青空が映えた教室で、ただ一人ピアノの椅子に座って本を読んでいる。その姿に似合う言葉はどこにもなくて、ただじっと彼を見つめた。

「……どうしました？」

教室の出入り口で立って見つめている私の視線に気付いたのか、彼は読んでいた本から目を離し私の顔を遠くから覗き込む。窓から入る春風が彼の髪を微かに揺らす。

「噂を、確かめに来ました」

しどろもどろになりながら答える。その意味が分からないのか「噂？」と彼は聞き返す。

「幽霊がピアノを弾いてるっていう噂、聞いたことないですか？」

この学校の東棟の四階にある空き教室の一室にはピアノが一台だけ置いてある。夏は暑く冬は寒いその教室は、十七時になると歪なピアノの音が聞こえ出すことから幽霊が出るという噂が学校中に広まっていた。その噂の真相を探るべく、教室に足を運ぶとそこには幽霊ではなくひとりの男の子がそこに座っていた。

「それ、僕じゃないよ」

読んでいた本を閉じて、床に置いてあった鞆を肩に掛け、入り口に立っている私の横を通り過ぎる。開けられたままの鍵盤の蓋について問いかけようとしたけれど、振り返った時には遠い距離に彼は背中を向けていた。

私は次の日も彼が居る東棟へと向かう。踊り場に設置してある窓に目を向けると澄んだ青空が広がっていた。まだ肌寒い日はあるけれど、暖かい風が吹き草木が芽吹く姿を見ると春になったことを実感する。世界が夏に向けて動き出す春が私は好きだ。

窓から吹き抜ける春風に背中を押されるように一段飛ばしで教室に向かうと、案の定そこには昨日と同じ男の子がピアノの椅子に座って本を読んでいた。

上から下に流れる活字を追う目は儂かった。それを壊さないように、私はそつとドアを二回ノックする。その音に彼は気が付いて、本を閉じて私の顔を見た。

「今日も来たの？」

不思議そうな顔をして彼は尋ねる。儂い目が私を捉える。

「噂の真相まだ聞いてないので」

「だからそれ、僕じゃないって」

そう笑って彼は立ち上がり、窓枠に寄り掛かって私の名前と学年を聞いた。少しくせ毛のある黒い髪と白い長袖のブラウスが青空に映える。

「二年の汐田しおたって言います」

「なら、僕は先輩だね。三年の伊弦いづるって言います」

そう言って彼は小さく頭を下げた。てっきり自分じゃないことを否定して去って行ったから悪い人だと思っていたけれど、意外とそうでもなさそうだ。

彼の姿をじっと見つめていると昨日と同じ文庫本を持っていることに気が付いた。

「伊弦先輩はいつも本を読んでいるんですか？」

入り口前で立ち止まったまま尋ねると、そうだねと言って先輩は教室に入るように手招きをした。私は一礼して教室の中に入り、彼と同じように窓枠に軽く腰掛ける。手に持っている本を見ると『蜜蜂と遠雷』と書かれていた。

「先輩が持っているその本はどんな話なんですか？」

『蜜蜂と遠雷』を指差しながら尋ねると、「これ？」と言って本を持ち上げた。今まで指に隠れて見えなかったけれど、黄緑色の表紙が特徴的だった。

「なんだろうなあ。まだ途中までしか読んでないけど、ピアノコンクールの話かな。四人のピアニストが競い合う、みたいな」

この表紙もまた絵の具みたいで綺麗だよね、と本のページをめくりながら楽しそうに彼は呟く。目にかかった前髪がそよ風に揺られ、儂げな瞳が少しだけあらわになる。

「そうなんです。私全く本読まないのて読む習慣がある人ってすごいなって思います」

「なら、明日からここ来る？」

予想外の提案に私は思わず先輩の顔を見つめる。彼の方が背が高いのか、私は自然と見上げるような形になる。

「……いいんですか？」

全く読書をしたくない人が読書をして感想を言えるわけじゃないから、迷惑をかけてしまふんじゃないか、と不安になる。

「うん、いいよ。ひとりじゃ寂しかったし」

そう言って立ち上がって振り返った先輩と私の間を暖かい風が通り過ぎていった。

次の日から私は本を読む習慣をつける為に彼が居る教室へと足を運び、読書をするよう

になった。最初は慣れなかった読書だったがけれど、先輩にオススメされた本を読むと、自然と集中して読めるようになっていった。午後五時になると彼は綺麗なピアノの音を奏でる。それもこの教室に来る楽しみのひとつだった。

「汐田さんは我逢^{がほうじん}人^{じん}っていう言葉知ってる？」

『真夜中の底で君を待つ』を読んでいると、伊弦先輩がピアノの椅子に座ったまま私の顔を覗き込んでいた。初めて聞く言葉に驚いて私は固まる。

分からないことを察したのか、彼は「えっとね」と天井を見ながら右足を組み、椅子に座ったまま口を開いた。